

私は六〇歳になるのがとても嫌だったので、努めて意識せずに過ごそうとしていたが、世間さまは結構お節介なもので、手を加え品をかえて還暦を自覚させようと仕向けてくるのだった。むろんお祝いのたぐいはすべて固辞したが、あるとき、私のかつてのスタッフや若い同僚たちが開いてくれた会は、謀られているとは知りながらも、楽しいものであった。そしてこれを機に、還暦をうしろめたがつっていたこだわりが少しづつ薄れていくように思えた。

私は一九二九（昭和四）年、世界大恐慌の年に関東平野の真只中、茨城県は筑波山の西方、鬼怒川と小貝川に挟まれた、肥沃だが貧しい農村地帯に生まれた。戦前、戦中までのこの辺りの農民の暮らしぶりは、郷土の大先輩である長塚節の小説『土』に活写されている通りである。漱石が「斯様な生活をして居る人間が、我々と同時代に、しかも帝都を去る程遠からぬ田舎に住んでいるといふ悲惨な事実」「余の娘が年頃になって音楽会がどうだの、帝国座がどうだのと言いつ暮る時分になったら、余は是非此『土』を読ませたいと思っている……其時、娘に向かって面白から読めといふのではない、苦しいから読めといふのだと告げたいと思つて居る」と述べたような暮らしが、つい半世紀前まで続いていたのだ。私は早熟だったのか、軍国主義少年にこり固まつていく一方で、文学にも親しんだ。『土』の風景描写のところなど、そらんじるまでに読んだ。節の歌集にも親しんだ。今でも「白埴の瓶こそよけれ霧ながら 朝はつめたき水くみにけり」とか「鬼怒川を夜ふけてわたす水棹の遠くきこえて秋たけにけり」など、いくつかの歌がすぐ口をついて出る。また、筑波根詩人と呼ばれた地方詩人横瀬夜雨の生家も隣村にあった。こうした郷土の文学的風土もあって、私は少年時代、帝国軍人になる夢を持つ一方、詩人になりたいという夢も持っていた。

それはいずれも儚ない夢に終わったが、戦後にも夢の残り火のようなものがあって、青年時代、その時々 の出来事や想いを歌や詩のようなものにして、日記風にメモ帳に書きつけておくクセがあった。その多くはすで行方知れずだが、還暦の感慨から古いノート類の整理を始めたところ、比較的まとまって保存されている数冊のノートが出てきた。

それらはいずれも、文学作品というより歌日記であり、詩的スケッチにすぎないものなので、いまこれを自分以外の人の目にさらすのは、自分の内臓をさらけ出すようで、とてもつらい想いもするが、「人類の青春」をめざして精一杯生きた私自身の青春の日々の赤裸な姿を、私の家族をはじめ、共に生きてきた親しい人びとに知ってもらうのも、私という人間を理解して戴くのに有意義ではないかと考え、あえて少数部に限って活字にすることにした。関係者が次々にこの世を去り始めたことや、このたび公職を離れたこと、さらに友人内田正博君の勧めなどが大きな契機となった。

マルクスは階級社会がなくなり、国家がなくなる世を予見し、これを「人類の青春」と呼んだ。私はかつてそれを信じ、そのために自分の青春を捧げた。それは壮大な徒勞

に終わった感もするが、しかしそのことを私は少しも悔いていない。いや、むしろ戦後のあの時期に、貧しさとの闘いや人間解放のための運動に心動かされることのなかった人びとを、私は余り信じる気になれない。戦後の疾風怒濤の時代、己れの保身や栄達的心をかなぐり捨てて、真剣に左翼に身を投じ、それ故にスターリン批判で深く挫折し、チェコ事件で決定的にコミニズムと決別した人びと——私はそれより早く一九五八年に決別していたが——に深く共鳴する。従って私には、今日のソ連、東欧革命の必然性が痛いほどわかる気がする。

いま、マルクスの子見とは異なった道を通って、階級と国家がその相貌を変えつつある。核戦争の脅威や地球環境問題を契機に、人類の利害が当然のごとく階級的利害に優先する時代になったし、かつての革命勢力としての先進国プロレタリアートも、自らの長い苦難に満ちた運動の成果として、体制内に存在位置を確保し、プロレタリアートは存在しなくなった。欧州を先頭に、国家がまず経済的に、次いで政治的に国境のカベをなくす歴史的作業に取り組み始めている。国家もまた溶解・再編の過程に入ったかにもえる。

共産党専制に帰結したコミニズムは滅んだが、ヒューマニズムに根ざしたソーシャリズムの理念と政策は、さまざまな形で資本主義の血となり肉となつて資本主義を修正し、混合体制としての現代資本主義を創ってきた。いまや有限な地球環境と衝突し始めた巨大な生産力と消費文明、麻薬、犯罪、エイズ、失業、貧富の格差、南北問題などの病弊に苦しむ現代資本主義を、地球市民の立場から改革し、制御していくためにも、ソーシャルな理念と政策がグローバルに必要不可欠の時代になつていくように思えてならない。

だが、こうした問題に本格的な解答を創るのは、もはや私たちの世代の仕事ではなくなつた気がする。しみじみと、いま私は思う。若さ日に夢みた人類の青春も私の青春も、ともにはるかなる彼方に去ってしまったことを。

しかし、同時にまた思う。人は夢なしには生きられないことも。私はいま感じる。私の内部に新しい夢が芽生えつつあることも。

最後に、多くのストレスに耐え、私の波乱多き人生につき合ってくれた妻と二人の娘に心から「ありがとう」と言いたい。

一九九一年六月